

神小だより

第12号



2月6日の雪景色

春はもうすぐそこまで来ています

暦の上ではもう春です。しかしながら、まだまだ寒い日が続いています。2月5日、6日には大きな寒波が到来し、降雪等による厳しい冬の寒さを体感しましたが、正門の寒椿は寒さが増せば増すほど、色鮮やかに咲き誇っています。厳しい冬に開花する植物の神秘さに魅了されるとともに、明るい寒椿の花から元気をもらっています。寒椿には、花姿のイメージから、「愛嬌」「申し分のない愛らしさ」という花言葉が付けられています。



気がつけば2月下旬に突入しました。この時期の月日が過ぎる早さに驚きます。巣立ちゆく6年生の小学校生活もあと残りわずかとなりました。寒椿の花言葉のごとく、愛らしい6年生が卒業すると思うと、淋しさが増すばかりですが、神小の子どもたちには、この花のように今のこの時を一生懸命に、色鮮やかに輝いてほしいです。

アリス祭りを終え、登校班の先導やスマイル班清掃を5年生が引き継ぐ等、交代が始まっています。また、音楽科の授業や休み時間、放課後には『卒業の歌』のピアノの音色と歌声が学校を包み込み、生活に「卒業」が色濃くなってきました。6年生を送る会では、最高学年として、下級生を、学校を大切に、伝統を継承し発展させてきた6年生への感謝の気持ちが満ちあふれていました。在校生からの心のこもったビデオレター・メッセージは、卒業を迎える6年生の心にしっかりと刻まれたことでしょう。



「修了と卒業」の意味をしっかりと考え、子供たちが学習活動や学校行事に邁進できるように、教職員一同がんばってまいります。どうぞよろしく願いいたします。

旅立ちと新たな出会いに向けて

学校の今昔、現在の入学は4月9日前後ですが、江戸時代の学校「寺子屋」の入学については、当時は2月の初午（今年2025年は2月6日）に入学することが、習慣になっていたようです。寺子屋（学校）は先生の家。入学年齢は、親が学ばせたい時、子が学びたい時だったそうです。ほとんどの子は7から8歳の時で学びに行ったそうです。入学は、親が子連れて「入れてください」と先生に頼みにいきます。許可が出ると、子供の机と文庫（今の道具箱）を寺子屋（学校：先生の家）に持ち運び置いてもらいます。今と昔の学校の様子は大きく異なりますが、子供たちが「学ぶ」という点から考えると、学校に対する価値や意義、目的は同じです。



家庭教育や学校教育、地域での教育が担う役割はとても大きいです。「教育」によって、子供たちの人格が形成され、未来が創られます。「地方創生は教育から始まる」と

という言葉が示すように、神領小学校・神山中学校での学びが「神山の未来」を創ります。「学校だけに・・・家庭だけに・・・地域だけに・・・」と、誰かに、何処かに、責任をおき、任せるのではなく、それぞれの立場で役割を分担し、「子供を主語」に連携を密にしつつ、それらを誠実に果たしていかなければならないと考えます。

先日、神山中学校入学説明会・体験入学があり、本校でも入学説明会・体験入学を行いました。中学校体験入学では、巣立ちゆく6年生の中学校での活躍を祈りながら、その様子を見守りました。中学生とともに学びを共有した体験授業や部活動見学を通じて、これからの中学校生活がイメージできたようです。入学までに、必要な力をしっかりと身につけ、中学校での更なる活躍に期待したいです。

本校では、来年度は18名の新生を迎えることができ、大変うれしく思います。新生が安全に安心をして小学校生活を送れるよう、入学説明会と体験入学を行いました。「神山神領の宝」として、大切に育てていきます。保護者の皆様、地域の方々には、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



学習について説明をしました。(鉛筆の持ち方)



算数セットのおはじきを使ってゲームをしました。



体育館で楽しく活動しました。



メダルを作って、プレゼントとして送りました。

本校教育活動や学習の様子をご覧ください。



【神領小学校HP】

校長室から ～「自立心に富んだたくましい人になる苦勞」～

先日、本校の入学説明会で『じりつ ～律して立つ 自律して自立する～』について話をしました。このことについて、その日の夜・・・「自分が親として、してきたことは何か。果たしてそれは、子のためになっていたのだろうか」と、子育ても終末を迎える今、もう手遅れではありますが、自身の子育てについて振り返りました。

愛する我が子に「余計な苦勞はさせたくない」、これは嘘偽りのない親心だと思います。では、どこまでが余計で、どこからが余計ではないのか。子供が失敗しないように、転ばぬ先の杖以上に、絶対に転ばない杖を与えるてしまっていないだろうか。疲れないように…暑くも寒くもないように…と、何から何まで大人がお膳立てをしまっていないだろうか。果たしてそれで、子供はたくましく前向きに生きる人に育つのか。

「余計な苦勞」が肝心要の考えであり、子育てに思い悩んだとき、子供が『たくましく前向きに生きる人になろうと努力をしている』『楽をして困難から逃げようとしている』かをしっかりと見極め、それを基準に、親や大人が『手をかけ過ぎてしまっていないだろうか』、逆に『大人中心の生活になって、子供への関心が薄れてしまい、子育てが面倒になって放任してはいないだろうか』等を内省し、判断していかなければならないと思います。そして、夢の実現に向けて勇猛果敢に挑戦し、なりたい自分になろうと努力をする子供たちを応援する親や大人になるためには、子以上に親も「自立心に富んだたくましい人になる苦勞」ができるか否か。

サッカー日本代表選手曰く「夢を実現するために、自立して生きていくことは幸せである。なぜなら、誰のせいでもなく、自分自身の責任で生きることの豊かさを味わうことができるから」この言葉から「自分の努力や行動の結果の責任は、全て自分にある」と考えたとき、どんな結果になろうとも、誰のせいでもなく納得できることが、自己確立を果たした自立に繋がると思います。

子育てに正解はありません。優劣もありません。自身の子育てを反省しつつ、親として「余計な苦勞」と「自立への苦勞」について常に考えていくことが、子育ての「根っこ」になるのではないかと考える今日この頃です。